〈したたる光〉
――大木惇夫の場合――
The Dripping Sunlight
――The Case of OHOKI Atsuo's Poems――

佐々木　充
SASAKI Mitsuru

筆者は、同じ表題で、すでに七篇の論文を公にしているが、「ある詩語の水脈」「北原白秋の場合」「三木露風の場合」「薄田泣菫と蒲原有明の場合」「山村暮鳥の場合」「川路柳虹の場合」「萩原朔太郎と室生犀星の場合」とそれぞれに副題を付して、区別してある(注1)。

室生犀星の「したたりやまぬ日のひかり／うつうつまはる水車」(「寂しき春」)という表現に集約的に完成されるところの、水ではなく光を、したたるものとして捉えるという、特異な発想による詩語の出没の跡を追う一連の試みである。

一

今回は大木惇夫を対象とする。

室生犀星よりも若い世代の詩人の仕事を探る最初である。

周知のように、大木惇夫は、最初、篤夫をペンネームとしたが、本稿では惇夫の表記で通す(注2)。

テキストは

『大木惇夫詩全集』全三巻(昭和44・8・1、10・1、12・1　金園社)

である。惇夫の単行詩集は左に掲げるように刊行されたが、『大木惇夫詩全集』は惇夫生前の刊行で、各巻とも惇夫自身によって編集され、単行詩集で重複掲載されている詩篇は除かれ、また、未刊行詩篇も掲載されており、惇夫の全貌を窺うに充分である。改作は無いと判断される。

『風・光・木の葉』	大正14・1・25	アルス
『秋に見る夢』	15・9・20	アルス
『危険信号』	昭和5・9・27	アルス
『大木篤夫抒情詩集』	6・9・12	博文館
『カミツレ之花』	9・3・5	鬼工社
『冬刻詩集』	13・1・1	草木屋出版部
『海原にありて歌へる』	17・11・1	アジヤ・ラヤ出版部
同右　国内版	18・4・21	アルス
『日本の花』	18・11・30	大和書店
『神々のあけぼの』	19・4・15	時代社
『豊旗雲』	19・5・5	鮎書房
『雲と椰子』	20・2・10	北原出版
『新防人の歌』(未刊行)		

『朱と金と青』（未刊行）
『山の消息』　21・9・20　健文社
『風の使者』　22・12・15　酣燈社
『冬刻詩集』（増補再刊）　23・3・10　靖文社
『物言ふ蘆』　24・8・20　立花書房
『失意の虹』　40・6・15　南北社
『殉愛』　40・11・3　神無書房

以下の調査は、この単行詩集の順に行われる。本文引用の際、ルビは省略した。

二

『風・光・木の葉』

(1)ごらん、
　落葉は月光のしたたりに濡れて、
　銀色の魚のやうに
　閃めき、ひるがへり降つて来る、
　おまへの白い頸に、胸に、肩に落ちて来る、
　そして、おまへの沈黙は
　憂鬱は金の心となる。（「月光と女と落葉」第二連）

『秋に見る夢』

(2)埋れ木に夢ばかりなる芽をつけて
　かりそめならぬ
　日のしづく。（「春の短章」）

(3)あをぞら　こぼれよ
　大日輪のひかりにとけてしたたれよ
　わかくさの童子ら
　双掌うけたり。（「童子」）

『危険信号』
『大木篤夫抒情詩集』
　これらの詩集になし。

『カミツレ之花』

(4)やはらかき
　緑の棘に
　金の日は
　みなぎり滴り、（「明日」第二連）

『冬刻詩集』

(5)人里は淡雪とけて
　みどりの芽、酒をかもしつ、
　日の雫したたる枝に
　鶯は流るるものを。（「地上」第二連）

(6)やはらかき枯芝しきて
　落葉松の林にあれば
　ここよ、げに山のいただき
　青空に鶇しば啼き
　日のひかりしたたりやまず。（「山上」）

(7)雨歇みて
　青竹にうつる月、

青竹がしたたるか
影ひかり、

散りがたの
木芙蓉の白きにも
わが酔は水のごと
はや覚めぬ。（「酔後」）

(8)月光のしたたるところ
白薔薇は何を想ふや。
うす青き油そそぎて
黒髪は何を怨むや。（「青怨」　靖文社版に拾遺したもの）

『海原にありて歌へる』
同右　国内版
『日本の花』
『神々のあけぼの』
『豊旗雲』
『雲と椰子』
『新防人の歌』
『朱と金と青』
これらの詩集になし。

『山の消息』
(9)かりそめの
日の雫なる。

楊柳の
蔭にしあれば

しろじろと
消えのこる雪。

しかはあれ
涸れし小川の

いつしかに
流れそめては

薄氷も
解けてたゆたふ

かりそめの
日の雫なる。（「きさらぎ」）

(10)魂恍れて夢見る時ぞ
さかづきも壺も何せむ、
大空ゆしたたるものに
吾は酔へり、ほろほろ酔へり。（「桑園にて」第四連）

(11)日は黄金、今日し滴り
さみどりに紫そへて
すがすがし夏は来にけり。（「山藤」第三連）

『風の使者』

(12)しみらにも、こころの緒をふるはせて
　蒼空ゆしたたる銀の日のひかり
　繡いろの黍の枯れ葉をそよがせて
　そことなく過ぎゆく風や秋の風（「繡いろの黍」第一連）

(13)神います　しるしなり
　蒼空の　かのますみ
　雲の薔薇
　しろがねの　日のしづく。（「蒼空」第一連）

(14)月の光に聴き入れば
　しみみに愛ぞまさりたる、
　落ちてふかるる枯れ葉にも
　月はしたたり、したたりて。（「断章」）

『物言ふ蘆』

　この詩集にはなし。

『失意の虹』

(15)星屑を映さん、甕に、
　掌にうけん、月のしづくを、
　こは、なべてしみらに凝れる
　良夜の愛の精なり。（「愛の頌」）

『殉愛』

　この詩集にはなし。

未刊行詩篇

(16)月の　ひかりにぬれて
　ジャガタラの　夜をゆく
　われや　さきもり
　胸は　熱し
　南十字よ、　ああ
　国は　はるか
　雲のかなた、
　かたらず
　なげかず
　ただに　掬むは
　月のしづく　（「月のしづく」第一連）

(17)愛はしみ入る日の雫
　母の祈りにまもられて
　わがめぐし児よ伸びゆけよ、
　さみどりの嫩草のごとすこやけく。（「母の祈り」第三連）

三

以上の十七作品を抽出できた。

これらは、大きく、二分類される。日光と月光とである。明らかに日光であるもの九、結局は日光に集約されることになろうと思われるもの二。計十一。それに月光六である。

この十七という数は、これまで調査した他の詩人に比べて、決して少なくない。むしろ多いといってもよい。そして右にみたように、日光と月光とに限定されていて、曖昧ではない。つまり〈したたる〉という語を乱用ないし汎用することもない。

大木惇夫のこの表現に対する姿勢は、この表現のオーソドックス、つまり蒲原有明の「日の落穂／月のしたたり」への回帰を感じさせるところがある。たとえば(5)「日の雫したたる枝に／鶯は流るるものを。」、(6)「青空に鶇しば啼き／日のひかりしたたりやまず。」。(11)「日は黄金、今日し滴り／さみどりに紫そへて／すがすがし夏は来にけり。」などは、明らかに時間の把握にほかならない。

また、(6)の「山上」は、もうひとつのオーソドックス――室生犀星の「したたりやまぬ日のひかり／うつうつまはる水ぐるま／・・・」と、重なるような雰囲気を醸していると言わねばなるまい。

やはらかき枯芝しきて
落葉松の林にあれば
ここよ、げに山のいただき
青空に鶇しば啼き
日のひかりしたたりやまず。

「ここよ、げに」などという語法は、まさに惇夫にまぎれもないけれども。

また「未刊行詩篇」の二作品(16)「月のしづく」と(17)「母の祈り」だが、前者「月のしづく」は戦時詠であろう。エピグラフに「――戦場ジャカルタにて」とあるし、全体の措辞、ことにも「かたらず／なげかず」などに、戦時詠の代表作「戦友別盃の歌」を連想させる。この推定が正しいとすれば、先に第「二」章で、『海原にありて歌へる』以下戦時下の詩集に注記して「これらの詩集になし」としたのだったが、実はそこに採用・収録しなかったまでであって、戦時中にもこの表現を用いた作品は制作されていたということになる。また「母の祈り」は、『大木惇夫詩全集』第三巻の分類では一九四九年から一九六八年の間の制作となっていて、明らかに戦後の作品である。

そういう事実に立ってあらためて眺め返すと、この表現は大木惇夫の出発から終焉まで、その詩業を通して惇夫を刺激し続けたと言うことができる。〈したたる光〉は、彼の生涯を通しての基本的なモチーフの一つとしてあったと言ってよいであろう。

注1 *「〈したたる光〉――ある詩語の水脈――」（「文学・語学」一四九号 全国大学国語国文学会 平7・12・10）
*「〈したたる光〉――北原白秋の場合――」（「千葉大学教育学部研究紀要」第四四巻Ⅱ・人文社会科学編 平8・2・29）
*「〈したたる光〉――三木露風の場合――」（「千葉大学教育学部研究紀要」第四六巻Ⅱ・人文社会科学編 平10・2・28）
*「〈したたる光〉――薄田泣菫と蒲原有明の場合――」（「千葉大学教育学部研究紀要」第四七巻Ⅱ・人文社会科学編 平11・2・28）
*「〈したたる光〉――山村暮鳥の場合――」（「千葉大学教育学部研究紀要」第四八巻Ⅱ・人文社会科学編 平12・2・29）
*「〈したたる光〉――川路柳虹の場合――」（「帯広大谷短期大学紀要」第三八号開学四十年記念号 平12・10・30）
*「〈したたる光〉――萩原朔太郎と室生犀星の場合――」（「千葉大学教育学部研究紀要」第四九巻Ⅱ・人文社会科学編 平13・2・28）

注2 『大木篤夫抒情詩集』（昭和6・9・12 博文館）まで大木篤夫、『カミツレ之花』（昭和9・3・5 鬼工社）から後は大木惇夫で刊行。